
カイン

澄川仁人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カイン

【Nコード】

N7654X

【作者名】

澄川仁人

【あらすじ】

遙か昔・・・いや、そう遠くない過去、人間と魔法使いの間で、大規模な戦争が行われた。かつて最強と呼ばれていた魔法使い族が負けるはずはないと世界中のだれもが思っていた。・・・だが、結果は違った。天より降り注いだとされる？魔石？によって人間は魔法使いを全滅させることに成功した。しかし・・・戦争は人間側の全くのおごりでもあった。これは主人公が世界の過去と現在いまを知り、世界のあるべき姿を探す物語。

戦闘多めにしようかなって思っています。コメディ要素もありま

५.

始まりの記憶（前書き）

物語の途中重いかな？って思うところもありますが、基本笑えると
ころ満載のお話を書こうと思います。
正統派な冒険ものを目指しています。

始まりの記憶

…何が起こったんだろう。何でこんなことになったんだろう。人々は逃げ惑う。この俺から。…俺は何もしてない…何もしてないはずなんだ。…ただ、守りたかったただけなんだ。

これが、運命なんだろうか。これが俺の人生なんだろうか。…違うそんなはずはない。あるわけがない。死にたくない。…ただ、それだけなんだ。

「じゃあ、俺と一緒に来るか」

誰だ…いや…誰だ…いい…俺に…近づくな…

「ほら、来いよ」

俺の運命はこの時…変わった。

数年後

俺の目の前には師匠と呼ぶようになった、俺の恩人がいた。俺達は向かい合って座っている。師匠が話があると言ったのだ。師匠は右目に眼帯をしている俺があの日持っていた剣で突き刺したのだ。師匠は全く動じてなかったけどな。

「お前はいつか旅に出るんだ」

「何ですか？師匠」

「理由はお前が考えろ」

「ずいぶん勝手ですね」

そういうと師匠はしばらく考えるようなしぐさを見せた。俺はその光景をじっと見ている。こういう状況にはだいぶ慣れてきた。師匠は考え出すと長いときで1時間近く何の反応も見せなかったこともある。理由を聞いても大人になれば思考時間が延びるのは当たり前だということぐらいしか教えてくれない。でも、今回は以外にも、ものの10秒ほどで話しかけてきた。

「お前は強さってなんだと思う？」

「強さ…ですか？そうですね、どんな敵にも負けないくらい圧倒的な力…つまり体力…いや腕力？…うーん言い表すのは難しい気がします。ですがその類じゃないですか」

「本当にそう思うか？」

「はい」

「…たとえばどれだけ圧倒的な力を持っていたとしてもそれをものともしないだけの兵力には勝てないかもしれない。「はあ？」…だが、どれだけ兵力を持っていたとしても、それを覆せるだけの策略を考えられる知力には勝てないかもしれない。いくら腕力や知力を持ち合わせていたとしても気力…つまり勇気がなければ何もできない。逆に勇気だけじゃどうしようもないこともある。それにな、時には財力…そう、金で解決できる問題だってある」

「じゃあなんですか、その全てを持っていることが強さなんですか？」

わけがわからなくなってきた。それじゃあ結局堂々巡りじゃないか。

「…強さは、結局は人を傷つけるものでしかない」

急に話が飛躍してきた。いつもそうだ、本当に大切なことは自分で考えろとしか言ってくれない。

「そりゃあ悪人が使えばそうでしょうが、人を守るための強さもあります」

俺がそういうと師匠が大声で笑い出した。俺は少しムツとしたが、こういう時の師匠の笑いは何か居心地のいいものを感じさせてくれる。

師匠はひとしきり笑い終わると急に話し始めた。

「悪人だって人は人だ。いくら正義の味方ぶつても人を傷つけていることに変わりはない。悪人には悪人の正義がある。お前はただそれを悪と呼んでいるだけだ」

要は勝手な偏見だとしても言いたいのだろうか。どうも納得がいかない。でも、そう言われればそうという言い方しかできないのも事実だ。

「どうせ俺が何を言っても納得しないんだろ。だから自分で考えろ。どんな答えが返ってきて俺は文句は言わない。それがお前ということだから」

「考えると言われても…」

「俺も…最初はお前と同じようなもんだった。正義が絶対だった。悪から人を守るのが絶対的に正しいこと、それしか考えていなかった」

急に師匠の雰囲気が変わった。俺に話しかけているというよりは、自分の過去を思い出しているように。こういう時の師匠はとも話しかけづらい。何かとても重くて暗いものがある気がするのだ。

「俺はな、ただ突っ走っていた。目の前の壁をぶち壊すのにただ躍^や起^{つき}になつていた。でもな、本当はそんなことをする必要なんて無かったんだ。最後の最後まで走り抜けた先にはな、何もなかったんだよ。誰も居なかった。俺は前しか見てなかった。後ろにあるもの大切差なんて分かっていなかった。…気づいたらな俺は、異常と呼ばれる存在になっていた」

『異常』、それは師匠の強さを言っているのだろうか。確かに師匠の強さは異常といってもいい。でもそれは本人がいつさつき否定したのだ。では、もっと違う何かがあるということなんだろうか。

「意味…分るか」

全くわけがわからない、話が矛盾しているわけではないがほとんどそれと同じだ。話がどんどん飛んでしまつてどこからどう理解すればいいのかすらわからない。

「分かるわけないでしょう。教えてくれないんだから」

「そう簡単に言える事じゃねえんだよ。特に子供にはな」

「子供扱いですか」

「十分子供だ。だからもう少し大きくなったら旅に出て今わかんねえ事の答えを探して来い。そしてまたいつかあった時にでもそれを聞かせてくれ。俺には……」

その先はあまりにも小声で聞き取れなかった。そのままぼうつとしていると急に師匠が元気になってしゃべりだした。

「よし！話はここまで。今日の特訓をしに行くぞ！！」

「もう8時間も特訓したあとじゃないですか」

「飯食って、風呂入って、寝る以外はこれしかやることないんだからうだうだ言っていないでやるぞ」

かんべんしてほしいよ、全く。

旅立ちの日（前書き）

カインがすっかりはつきり敬語を使うのは幼少期の話の時や師匠の前のみです。

旅立ちの日

ここはとある小さな村のはずれにある家の前である。

そして今、一人の青年が旅立とうとしているところでもある。

「それじゃあ行つてきます」

「ああ、頑張つてこい、カイン」

具体的に何をがんばればいいのか教えてもらいたかったが…

「ところで師匠」

「なんだ？」

「この馬鹿でかい大剣は絶対持つて行かなきゃいけないんですか」

俺の背なかには俺の身長と同じくらいの大きさの剣がある。今時旅人でもこんなものを持ち歩く人はかなり珍しい。

……つかめつちや重い。

「当たり前だ」

「ええつと、理由は？」

「かつこいいだろ」

「理由それですか!!」

「そうだ」

開き直ったよこの人。

「あの、置いていっていいですか？」

「殺されたいか？」

そついいながら師匠は背中にある剣に手を伸ばす。（師匠は俺のと同じ大きさの大剣を二本持っている。自分で作った物だといつていた）

「い、いや、まだ死にたくないんで持っています」

いくら昔より強くなったからといって師匠に勝てるとはこれっぽっちも（小指の先ぐらい）思っていない。5秒で死ぬる自信がある。

（まあ師匠は治療術を使えるから死なせてくれないけど）

「よろしい…：そうだと忘れるところだった」

そついつて師匠はどこから取り出したのか生き物らしきものを俺に投げつけてきた。反射的に受け取る。

「なんですか、これ？」

「餞別だ」

俺はゆっくりと手の平を広げて中のあるものを確認する。

「キユイ？」

それは尻尾のでかい青色のリスのように見えた。

「ペット…ですか」

「非常食」

「は？」

「だ・か・ら、非常食だ！」

「ええっと、名前は？」

「あるわけないだろ」

「ですよね」

なんだか手の中のリスもどきがかわいそうになってきた。

「うまいぞ」

「食べたことあるんですか！」

「もちろん」

「もう…行きます」

俺は非常食？を腹のあたりのポケットに入れると歩き出した。

振り向くと師匠は手をふるなんてことはせずただ黙って立っていた。

ところで俺には一つ悩みがある。それはなにかという点。

結局俺は何のために旅をするんだろうなあ

Side ヴァン・フランシエス（師匠）

…もう行ったか、早かったな。お前を拾ってから12年、お前は強くなった。（俺に勝つには800年ほど早いかな！）

俺が教えられることは全部教えた。後は自分で学べ。そしてもっと世界を知れ。

さあ！！

行ってこい

旅立ちの日（後書き）

師匠との修行のお話はまたあとでやります。

ある森にて（前書き）

sideはカインがニュートラルです。

ある森にて

俺の名前は、カイン・フランシエス。旧姓はバルフォアだ。別に婿入りしたわけじゃない。師匠に拾われたときになった。

さて、そんな俺だが今とても困っている。なぜ困っているかというと。…いや、その前に一度周りを確認してみよう。

…いま俺が立っている場所のまわりは大量の木と数本の道。

うん……やっぱり……

「迷ったああああああああああ」

そう、二二二二日ほどずっとこの森の中にいる。

そこで俺は俺の肩に乗っかっている生物に声をかける。

「おい、非常食、早速お前が必要になってきたかもしれん。」

「キュウウウ!?!」

非常食（まだ名前はなし）は俺の肩から飛び降り、目の前に立って全身で抗議の意を示している。やっぱり人の言葉が分かるらしい。

「んなこと言ったってなあ、非常食だもん、お前。」

ガタガタガタガタ

「キュイ!! キュキュキュキュ!!」

ガタガタガタガタ

「んじゃあお前道分かるのか。」

「キュ!! キュ!! キュ!! キューー!!」

そこで初めてこいつが俺の後ろを指しているということに気が付いた。

振り向くとそこには馬車が迫ってきていた。

ラッキー。

「おい、その馬車! 乗せてくれないか?」

ガタ。

馬車が止まり、人が下りてくる。男二人女一人の三人組だ。もう一人乗っているが、どうやら運転係らしい。

そこで俺はもう一度「乗せてくれないか。」と言った。すると三人組の中で一番ごつい男が近寄ってきた。

「おうおうあんちゃん、お困りかい？」

「道に迷ったんでね。どこでもいいから近くの町に送ってくれないか。」

「分かりやした。ひっひっひ。ただし。」

行先は地獄だなあ！！

男は腰に差していたサーベルで襲いかかってきた。

あーあ、ミスった、盗賊だったか。

非常食はいつのまにか俺の服の中に入り込んでいる

盗賊がサーベルを振ってきたのでとりあえず後ろに跳ぶ

「へへ、なかなかいい動きしてんじゃないか。だが、この盗賊団、黒翼よくたかの鷹たかに狙われたからには生きては帰れないぜ。ぶっ殺してから身ぐるみ剥がしてやんのがうちの流儀よ。そうだなあ、その背中の剣なんか高く売れそうだ。」

黒翼の鷹ってどんなネーミングセンスしてんだ。それにたった三人

(四?)で盗賊団って。まあそんなことより。

「あんまりぐだぐだ話しているとはずれるぞ。」

「ああ?はずれるって何が?」

お前の肩だよ。

俺は意気揚々と名乗りを上げるのに夢中になっていた盗賊の右肩を左手でつかんで引つ張るようにして後ろに回り、そのまま右手で相手の右腕をつかんで背中の方へと思いつきりねじりあげた。

「ぎゃあああああ!!」

「よし、一人目」

さあ、喧嘩でも始めようか。

盗賊団、黒翼の鷹（前書き）

あーだりいー、なんかいろいろとだりいー

盗賊団、黒翼の鷹

地面に転がっている一人を見てほかの二人が声を上げた。

「兄貴!!」

…兄貴?こいつら兄弟なのか?

「なあ、おまえら…」

俺が次の言葉を言いかけた時、残っている男のほうで剣の切っ先をこちらに向けて突っ込んできた。それを体を右にひねってよけ、足をかけながら腕をとって女のほうに投げつける。

「うが!」

「きゃあ!」

二人はそのまま地面に倒れこみ、これで地面に転がってるのは三人になったわけだが。

「にしても弱いな、お前……ら!？」

よくよく見てみると地面に転がっていたのは二人だけだった。最初の男が肩を押さえながら立ちあがっていて、俺の背中に指を指している。

いや……指しているわけじゃない。あれは……。

「喰らええ!」

男の指にだんだんと赤い球が生成されていく。
あれは…火か。とっさに体を反転させて向かい合う体勢になると、
さつき投げ倒した二人が両側から押さえつけてきた。
ち、面倒だな。

「フラッシュユブレイズ
轟炎の閃光」

男の指から発射された炎の玉は、まっすぐ俺の目の前に飛んできて、
距離にして2メートルほどのところではじけるように広がり、俺の
体に覆いかぶさってきた。

「おおりゃあ！」

俺は押さえつけてきていた二人を体を思いっきり曲げ、お辞儀をす
るようにぶん投げた。もちろん炎の方向へ。

「「ぎゃああ！」」

投げ飛ばされた二人は見事に炎に突っ込んで、消火&そのまま放つ
た男にもぶつかって撃沈。……っーかよく考えりゃ人がぶつかつた
だけで、炎上するわけでもなく消えるって、俺がもろくらつても大
丈夫だったんじゃないかねえか？なんかあたって奴らも火傷してるだけみ
たいだしな。まあ要するに……。

「しよぼ」

「な、しよ、しよぼいだと！」

炎を放った男はまだ元気らしく（あれ、そっぴやいつの間に肩入れ

「たんだ？）ほかの二人ともども立ち上がって、構えている。」

「もういいだろ、どうせ人工魔石じんごうませきなんだから、しかも最下級の」

そういうと男はぶちぎれたらしく今度は剣に炎をまとう形で切りかかってきた。ま、そこまでやるといふのならこっちも多少の誠意（？）は見せてやろうか。

俺はゆっくりと背中せなかの鞘（というかほとんどただの留め具）から剣を抜き、両手で構える。そのうちにも男はどんどん近づいてくる。

「うあああああああ！」

ああうるせえ、ほとんど奇声にしか聞こえねえ。俺はただのんびりとした感じで、相手が切りかかってくるのと同時に剣を真一文字に振る。たったそれだけで決着はついた。

「やっぱ弱いな」

男の剣は脆く崩れ去った。

「な、なんで……」

何でってそりゃあ。

「そもそも力の使い方が乱雑過ぎる。そんなんじゃあ安物の剣なんて簡単に壊れる。まさか、その魔石、ついさっき盗ってきた盗品を試しに使ってみたなんて言わねえよな」

「そんなんじゃねえ！」

こいつの怒り方からして違ってたみたいだ。まあそれにしても未熟なものには変わりないが。

「まあ、とりあえず負け認めろよ」

男は「ちい！」と悪態をついた後、おもむろにポケットから淡く輝く赤石を取り出し、握りしめて何かを祈るように目を閉じた。
……少しして男がしゃべりだした。

「はあ、分かったよ。負けだ、負けたよ。「兄貴!？」……ただし、今度会ったときは負けねえ。まあ、今はいい、負けたからにはさっさとトーンずらくとするか!」

そついい終わって今度は馬車に乗っている奴に話しかけた。

「おい、お前はもうどこへでも行け。ただしこいつを乗せてってやれよ」

「は、はい」

初め馬車に乗っている奴の声を聞いた。……何とも中性的な声だ。

「うつしや行くぞお前ら!」

「ちょっと待ったあ!」

男を呼び止める。てか、ここは呼び止めねえとなんかあいつがかっこいい感じで終わんねえか？

「なんだ?」

「せめて名前ぐらい言って行けよ。勝手に襲って勝手にさいならか？」

そいいうと男は「ああ」とつぶやいて、俺と向き合った。

ほかの二人を呼び寄せる。(ごめん、そういやさっきからなんかぶつぶつ言ってたけど忘れてた)

「俺の名前はクロウ・ガーランドだ。こいつらは兄弟だ。こっちの男のほうか……」

二人が名乗りだす。てかやっぱ兄弟なのか。

「俺はウィグ」

「んでこっちが……」

「私はリンだ」

そこまで言つと三人そろって身をひるがえした。

「」「それじゃあ、さらば！」「」「」

三人は森の奥のほうへと走って行った。

「……………行っちゃったよ、おい」

ま、いいか。さて、それじゃあ、後は……………馬車の奴か。

Side クロウ・ガールランド

なんとなくおんびん穩便にことが済んだ感じではあったが、言葉とは裏腹にクロウはとても憤りを感じていた。

くそ、なんで、あんな奴に！あんな奴に負けたんだ！俺はこんなところであんなに暇なんかないのに！あいつらのためにも！故郷のためにも！くそ！くそ！くそ！くそ！

「「あ、兄貴？」」

強くならなきゃならねえ、俺は、俺は！強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く！！

……しばらく後に、この男が、狂気と悲劇を呼ぶことになるのはカインもそしてクロウ自身も知る由もないことである。

盗賊団、黒翼の鷹（後書き）

しばらくくつてのは本当に結構後のことです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7654x/>

カイン

2011年11月18日06時15分発行